



## つくしが大きくなったら、スギナになるの

### つくしは、すぐかれる

春先に、茶色の芽を出すつくしは、スギナの子ともいわれます。でも、つくしが、そのまま大きくなって、スギナになるわけではありません。

つくしは、筆のほ先のように見える部分が、だんだん開いて、やがて、粉のような胞子を飛び散らせます。つくしは、胞子を飛ばした後、すぐかれてしまいます。この胞子が、種と同じ役目をします。胞子は、地面に落ちて、芽を出し、つくしが出てきます。

### つくしは、スギナの子孫を残す役目をする

つくしがかれたころ、同じ場所にスギナが芽を出します。つくしの根もとをほってみると、地面の下で、スギナと地下のくきでつながっているのがわかります。

つくしは、スギナが子孫を残すため、胞子を作って飛ばす役目をするものなのです。地下のくきでつながっているスギナが、もともとの植物の体ということになります。スギナは、葉緑素のはたらきで、光の助けをかりて、水と二酸化炭素からでんぷんなどの栄養分を作り、体を大きくし、地下のくきをのばしていきます。そうすれば、たくさんつくしが出て、子孫がふえていくというわけです。

(監修・矢野 亮)

